

令和4年度 川崎市岡本太郎美術館
事業報告・評価書

川崎市岡本太郎美術館

目 次

1 展覧会事業

(1) 企画展

「小松美羽 岡本太郎に挑む——霊性とマンダラ」展・・・・・・・・・・ 1

「第26回岡本太郎現代芸術賞（TARO 賞）」展・・・・・・・・・・ 3

(2) 常設展

「太郎の創造展—創らなければ、世界はあまりにも退屈だ」展・・・・・・ 4

「岡本太郎とにらめっこ」展・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

2 資料収集・整理、調査研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

3 作品の保存・修復、貸出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

4 普及企画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

5 広報活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

6 施設・設備の整備・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

令和4年度事業について

1 展覧会事業

(1) 企画展

事業名	「小松美羽 岡本太郎に挑む——霊性とマンダラ」展
会 期	令和4年6月25日（土）～8月28日（日）
目 標	小松美羽は、祈りをテーマとして制作する現代アーティストである。女子美術大学短期大学部在学中に銅版画《四十九日》を発表し、注目を集めプロの道へと進んだ。渡米を機に、大型の絵画作品を制作するようになり、近年は有田焼等にも制作領域を拡大している。国内外で精力的に活動し、高い評価を得て《天地の守護獣》が大英博物館に収蔵されたり、《新・風土記》を出雲大社へ奉納したりするなどしている。本展で初公開する《ネクストマンダラー大調和》も東寺に奉納する。 本展は、小松美羽の初期作品から最新作までを一堂に会する展覧会である。展覧会の核となる「第Ⅳ章 霊性とマンダラ：「大調和」の宇宙^{コスモロジー}」では、岡本太郎《渾沌》を中心に、小松美羽の《ネクストマンダラー大調和》や「エリア 21」シリーズ等と岡本太郎作品が対峙する象徴的な空間を作り上げる。さらに、「第Ⅴ章 未来形の神話たち：抽象と象徴の冒険」では、岡本太郎《明日の神話》に触発されて制作し、同じ5枚パネルで構成した《神話は未来形》を展示するほか、抽象的なモチーフが現れはじめた最新作を発表する。展覧会の他、内覧会日にはライブペインティング、会期中葉には子ども向けのワークショップなど、小松美羽作品を身近に感じられるイベントを開催する。
内 容	展示構成 第Ⅰ章 線描との出逢い：死、自画像、エロティシズム 第Ⅱ章 色彩の獲得：大いなる「目」との邂逅 第Ⅲ章 開かれた「第三の目」：存在の律動^{リズム} 第Ⅳ章 霊性とマンダラ：「大調和」の宇宙^{コスモロジー} 第Ⅴ章 未来形の神話たち：抽象と象徴の冒険 出品作品 ・小松美羽作品 平面 85 点、立体 12 点 ・小松美羽ポートレート（撮影：田原桂一）2 点 ・岡本太郎作品 立体 2 点

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

本展では、小松美羽の学生時代の作品から最新作までをほぼ時系列順に展示し、作家のこれまでの軌跡とこれからの展望を見せる構成とした。また本展の目玉として、会場中央の第Ⅳ章では東寺奉納予定の《ネクストマンダラー大調和》などの重要作品を展示し、照明や造作を駆使して小松の世界観を体現する象徴的な空間を作り上げた。会場内では作家のファンが熱心に作品を鑑賞する姿を度々見ることができた。

会期中、55 日間の入場者は計 22,332 人と、2 万人を超える好記録となった。アンケートでも、作品・作家に対する好評が多かった。また、小松美羽展が目的であったが、当館に来館したことで岡本太郎に関心を持った方も多かった。本展は、現存作家の個展が岡本の芸術の紹介にもつながる良い一例であったといえ

る。

入館者数が好調だった理由の1つとして、積極的な広報活動が挙げられる。プレス向けライブペインティングを開催することで各テレビ局・新聞社にアピールをしたほか、館公式HP・SNSを活用して展覧会の情報発信に努めた（Facebook 12 投稿、Instagram 9 投稿、twitter 45 投稿（作家本人や展覧会レビュー等のリツイート含む））。また、作家本人にもご協力いただき、作家のSNSからの情報発信も積極的に行っていた。

[関連事業・イベント]

内覧会当日に、小松美羽によるライブペインティングをプレス向けに公開し、展覧会の宣伝に努めた。また、展覧会会期中には会場外で2回ワークショップを開催し、子どもが芸術に気軽に触れることのできる機会を設けた。

- ・「小松美羽ライブペインティング」6月24日（金）14:00～16:00、参加者約180名
- ・「わたしの・ぼくの神獣・生きものを描こう！」8月4日（木）14:00～15:30、講師：小松美羽、参加者14名
- ・「神獣を描こう！」8月13日（土）①13:00～13:30、②13:40～14:10、③15:00～15:30、④15:40～16:10、参加者計17名

[課題・反省等]

会場内での混雑が見込まれたため事前予約システムを導入したが、事前予約システムの利用者は観覧者全体の約半数にとどまった。

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など）

[A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]

A

- ・活気的な企画であり、岡本太郎と小松美羽の創造へのエネルギーが混雑することで、来館者にとっても魅力的な展示になったと感じる。今後の企画立案にとっても、大きな足掛かりとなったと考える。
- ・現代作家による岡本太郎に対する新たな解釈ともいえる展覧会として、内容・集客ともに成功例のひとつといえる。
- ・若手の現存作家が「岡本太郎に挑む」という企画は、若手作家の登用、作品発表の場を与えるとともに、岡本太郎の新たな視点を見出すという点においても意義があると思われる。今後も継続されていくのが楽しみである。
- ・岡本太郎と現代作家のコラボレーションという試みが良かった。今後もこうしたコラボレーションから岡本太郎の新たな面、可能性を開拓してほしい。多くの参加者がリアルに作品制作の現場に立ち会えるライブペインティングといった現存作家の展覧会ならではのプログラムも評価できる。
- ・個展形式の展覧会だが、岡本太郎と四つに組んだ二人展と考えてもよく、若いながらもしっかりキャリアを積んでいて実力も充分備えた作家であったことがよかった。初めての試みだったが、ライブペインティングもあって広報宣伝効果が大きかった。関連イベントに「神獣」を描こうというのがあるところなどは岡本太郎美術館らしい。今後このような個展形式を実施する際の作家の基準といってもよい。

事業名	「第 26 回岡本太郎現代芸術賞（TARO 賞）」展
会 期	令和 5 年 2 月 1 8 日（土）～ 4 月 1 6 日（日）
目 標	「岡本太郎現代芸術賞（TARO 賞）」展は、岡本太郎の精神を継承し、自由な視点と発想で、現代社会に鋭いメッセージを突きつける作家を顕彰するために設立された。今年で 26 回目をむかえる本賞を通し、21 世紀における芸術の新しい可能性を探り、意欲的な作品を紹介する。
内 容	本年度は、595 点の応募があり、23 名の作家が入選。最終審査の結果、特別賞 4 名が選出された。なお、大賞の岡本太郎賞、次点の岡本敏子賞については、「該当作なし」という結果となった。 特別賞：足立篤史《OHKA》、澤井昌平《風景》、関本幸治《1980 年のアイドルのノーバン始球式》、レモコ - レイコ《君の待つところへ》 入 選：池田はなえ、牛尾篤史、大洲大作、奥野宏、空箱二郎、川上一彦、川端健太、柴田英昭、高田哲男、千原真実、都築崇広、ながさわたかひろ、西除闇、NISINO HARUKA、平向功一、Hexagon artist®、宮本佳美、山田愛、山田優アントニ 関連イベントとして、来館者による人気投票、来館者から作家へメッセージを書く「お手紙プロジェクト」、入選作家によるリレートーク（全 4 回）を実施（予定）。

内部評価（自己点検）	
[実施状況・成果等]	
第 24 回 TARO 賞からオンラインでの募集を開始し、今回で 3 回目の運用となった。応募総数 595 点のうち、オンラインでの応募が 288 点、郵送が 307 点であり、約半数がオンラインシステムを活用し応募している。昨年度までの反省を踏まえ、応募フォーム質問項目のシステム設定の改良や、職員の作業フローの構築等を行った。これにより応募データ管理の作業効率と正確性を上げることができた。	
[課題・反省等]	
今回は、岡本太郎賞・岡本敏子賞にふさわしいと判断される作品がなく、残念ながら「該当作なし」という結果となったため、次回に向けては、公募等の広報内容を見直すなど、既存の枠組に捉われない作品が集まるよう工夫を行っていく必要があると考えている。	

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など）	A
[A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]	
・今回は、岡本太郎賞、岡本敏子賞ともに該当なし、という結果とはなったものの、やはり、賞の重みを考えれば、妥当な作品がない場合には、勇気ある決断も必要であると考え、こうした結果が、当事業をより高次なものへと引き上げるであろうことが期待される。多くの意欲的な作家の輩出に、ますます期待が高まる。 ・国籍・年齢を問わず、規程内の寸法であれば大規模なインスタレーション作品でも応募できる開かれた現代芸術賞として、入選・入賞者の展示は見応えがあり、作家の育成支援として十分な成果を上げている。 ・今年度は太郎賞、敏子賞への該当作品がなかったのは残念であるが、例年、意欲的な作品が応募されて	

いることから、より広い範囲での告知をされることで、一層の飛躍が期待できる。

- ・26回継続し、多数の応募があったから、この賞の存在が作り手を刺激するメディアとなっていることが改めて感じられた。ただ、大賞、次点が出なかった理由については検討が必要かと感じた。また、来館者が投票を行うプログラムは、別視点での評価となる興味深い取り組みなので、その結果を審査員に伝えることで、多様な評価の視点と存在を共有してほしいと感じる。
- ・それぞれの作家のアイディアに面白いもの、光るものはあるが、圧倒的な表現を見せる作品がない。美術表現の限界かもしれないが、30年近く続けてきたことが貴重である。作品の中から変化が現れてくると思う。

（２） 常設展

事業名	「太郎の創造展—創らなければ、世界はあまりにも退屈だ」展
会 期	令和4年5月12日（木）～ 8月31日（水）
目 標	はっきりとした原色の色彩とエネルギッシュな筆のタッチが特徴的な絵を描く岡本太郎。 彼の作品は、どのように生み出されるのか。1960年代から取り組み始めた“呪術性”のある抽象絵画のように、アドリブで思いのままに描いているようにもみえる作風の岡本だが、じつは下書き（ドローイング）をしっかりと描いてから制作している。本展では、岡本太郎の作品の制作過程をテーマに、人となりや芸術観、技法に触れながら、ドローイングや絵画、立体作品などを紹介する。
内 容	主な内容 1. ドローイングと完成作品の油絵をともに展示。 2. 少年時代のエピソードや作品制作に込めた思いなどを、会話形式のパネルで紹介。 3. 岡本太郎が実際に使用していた画材や机を公開。 ●出品作品・資料 油彩：《アドレッサン》《赤のアイコン》《天空に我あり》《遭遇》《犬》《呼ぶ》《マラソン》 ドローイング：《天空に我あり》《マラソン》《死の灰》《若い時計台》《天に舞う》 彫刻：《若い時計台》《ひらく肖像》《未来を拓く》《平和を呼ぶ》 その他：立体作品の石膏原型、岡本太郎が実際に使用した筆や絵具、パレット、筆洗器 他 【関連イベント】 ガイドブック配布「ひらく・そうぞう展」 内 容：常設展会期中、ドローイングや油絵、FRP 彫刻の技法や素材について、まとめた子ども向けガイドブックを配布した。ページを開くと、ドローイングから完成作品が出来るまでの流れを感じることができ、内巻き四つ折りの冊子のため、ドローイングと完成作品が見比べられる。 対 象：小学生以上 配布期間：7月23日（土）～8月17日（水）9:30～17:00 配布場所：常設展示室入口 配布枚数：約3,000枚

内部評価(自己点検)
[実施状況・成果等] ・“作品の制作過程”に焦点をあてた展示を実施した。 例：油絵・ドローイング・銅版画の技法紹介。絵画《マラソン》、彫刻《未来に拓く》の制作過程を写真パネルで掲示。制作に関して「太郎さんが答える Q&A」パネルを設置。岡本が実際に使用した机の上に、油絵具・パレット・筆洗器などを展示。一部彫刻には床面からスポットを当て、来館者の創造力を広げるような演出をした。 ・企画展「小松美羽展」に繋がるよう、呪術関連の絵画や彫刻、銅版画を出品した。 ・パネルをしっかりと読み、長時間作品鑑賞をする方が多く見受けられた。 ・来館者アンケートでは、肯定的な評価・コメントが数多くあった。 [課題・反省等] ・会期が「展覧会 岡本太郎」と重なり、展示可能な作品数が少なかったため、通常あまり紹介できないドローイングや資料も活用し、展示の工夫をしたことで、来館者からは作品制作の過程や岡本の人となりもわかりやすいという声を多く頂けた。 ・パネルの内容も Q&A 形式にするなど工夫をしたが、一部アンケートではパネルが多すぎてどこに注目すべきかわかりにくいという意見もあり、まとめて配布資料にする部分があってもよかった。

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など） [A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]	A
・岡本太郎の言葉を、うまくタイトルに盛り込むことによって、来館動機にもつながったと想像している。創らなくてはならない、という作家が内面にたぎらせる意欲の一端を、紹介することになった企画と感じている。 ・作品を制作することの楽しさや喜びを子供たちにも伝えようとする内容は夏休み期間に相応しい。また、コロナ禍で人との距離が離れてしまう状況の中で、作家の手の動きを直接見て取ることができるドローイングに焦点を当て、リアルな経験を提供したことも意義があった。 ・貸出による展示作品が少なかったというマイナス要素を転換し、創作において旺盛かつ多様な側面をもつ岡本太郎という作家の制作のプロセスに着眼したのは興味深い。関連イベントとあわせ、新たな視点を生む機会になったのではないかと思う。今後も普段展示することの少ない資料などにも目を向けた展示を行っていただきたい。 ・ドローイングと作品を並置する、キャプションを通してメッセージを伝える、使用した画材などを見ることができる、など、岡本太郎の多面性を鑑賞者が考えるきっかけや、作品制作の背景について想像する機会を提供するととても良い展示企画だった。 ・岡本太郎のエッセイには魅力的な言葉や、見る人に思考を促すフレーズがたくさんあり、それをコンセプトにして展覧会を企画することもできるのだなと、いつも思う。	

事業名	常設展「岡本太郎とにらめっこ」展
会 期	令和5年2月1日（水）～4月16日（日）
目 標	1960年代後半より、岡本太郎の作品には「顔」のモチーフが増加していく。岡本にとっての「顔」の重要性は、彼の言動や著作にもよく表れており、1980年『美の世界旅行』『宇宙を翔ぶ眼』には「世界の美のあらゆる層に何と様々な顔があり、また眼があるのだろう。（…）一つの顔の宇宙の中に、また無限の顔、そして目玉が光っている。言いようのない実在感をもって」と語っている。岡本にとって世界は様々な顔に溢れたものとして表れていたともいえるだろう。本展では岡本太郎が、「顔」に溢れたものとして捉えた世界を彼の作品を通して紹介する展覧会を開催した。
内 容	常設展「岡本太郎とにらめっこ」は、1章「顔、にらめっこ！」2章「眼、眼、眼！！」3章「マスカレード（仮面舞踏会）」の構成とした。1章では、顔が頻繁に描かれ始めた60年代後半より前の顔をモチーフとした作品を時系列順に展示した。2章は、岡本太郎が顔のパーツの中で最も重視した眼に焦点を当てたものとした。最後に3章では、第3室から彫刻の部屋まで使用し、岡本太郎の作品たちが仮面舞踏会をしているイメージで展示した。岡本太郎の「顔」の世界を体感できるような展示構成とした。 今回は、日本工業大学情報メディア工学科の協力により「蘇る太陽の塔 Ver. 5」において、1970年の大阪万博当時の《太陽の塔》の内部と外部の様子が分かる3D映像を放映している。この上映に併せて、展示室第2室から3室の一部で「太陽の塔」を紹介するゾーンを設けた。

内部評価(自己点検)	
[実施状況・成果等]	
本展では「顔」に対する岡本の思想を楽しく体験して頂くために、平面、立体、インダストリアル作品を可能な限り多く展示した。本展の関連イベントとして日本工業大学の協力で「蘇る太陽の塔 Ver. 5」、子ども・子育て当事者研究ネットワーク ゆるふわの主催で「創ってみよう！わたしの“こころの街”！—こども当事者研究×岡本太郎美術館」を開催（予定）。イベントの対象年齢を幅広く設定し、様々な層の方が参加できるものとした。また、展覧会と関連イベント双方の内容をバランスよく開催するよう努めた。	
[課題・反省等]	
岡本太郎著作、「わが世界美術史」『芸術新潮』（1970年1-12月）、『美の呪力』（1971）、『美の世界旅行』（1982）で語られた「顔」への言及から、本展を構成した。これらの中では、やや抽象的に世界を「顔」に溢れたものとして出現していることや、仮面の重層的な意味について語られている。本展では、これらの点を楽しく体感して頂くことに重点を置いたが、「顔」や「仮面」のモチーフに現れる岡本の重要な思想について、よりわかりやすくパネル等を用いて提示すべきであったことが反省として挙げられる。	

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など） [A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]	A
・岡本太郎のギョロリとした眼差しを想起するタイトルに妙味をおぼえた。収蔵品をふんだんに活用することによって、様々な視点から太郎作品の魅力を引き出した、好企画であったのではないだろうか。 ・顔というモチーフをきっかけに、生命力にあふれた岡本太郎の世界を紹介する企画としてたいへん親しみやすい印象がある。あわせて、関連企画において日本工業大学や子ども当事者研究ネットワーク ゆるふわなど外部機関との連携を実現したことも評価できる。 ・太郎の著作物との関係から「顔」というモチーフを取り上げた内容は興味深いものであったが、今後も岡本太郎美術館ならではのさらなる踏み込んだモチーフや主題の発見、学術的な新知見とわかりやすさを兼ね備えた展覧会を期待している。 ・「顔」という視点から構成された展示で、顔や人間に関心をもつ乳幼児という、新たな鑑賞者層に岡本太郎を訴求する可能性があると感じた。また、3D映像が鑑賞者の関心を惹いていた。大学との連携活動の意義と可能性を感じた。 ・何でも展覧会になる岡本太郎で、「顔」と「目玉」に着目したところは慧眼であった。作家が一番関心を持つのは顔であり、それは自画像でもある。岡本太郎は「仮面」について言及しているが、もっと面白い素材を集めて大きなテーマの展覧会や関連イベントになると思う。	

2 資料収集・整理、調査研究

事業名	資料収集・整理、調査研究
目 標	岡本太郎・一平・かの子に関連する資料、ならびに岡本太郎と同時代に交流のあった作家の作品資料を収集する。
内 容	岡本太郎と関連作家の資料の収集。 岡本可亭・一平・かの子及びその関連作家の資料を収集する。 岡本太郎没後に制作された関連グッズ等も収集対象とする。

内部評価(自己点検)	
[実施状況・成果等]	
令和4年度購入資料 岡本太郎デザイン家具（「いろどり」4脚 「ゆったり」3脚） 令和4年度寄贈資料 岡本一平関係資料一式（個人からの寄贈） 岡本太郎画集関係資料一式（個人からの寄贈） 岡本太郎及び岡本一平関連資料（個人からの寄贈） 岡本一平書簡（個人からの寄贈）	
[課題・反省等]	
今年度は、岡本一平・太郎の関係資料を多数ご寄贈頂くことができた。岡本太郎関係者からの岡本一平関係資料は、一平と太郎の書簡をはじめ、当時の父子や家族の交流の様子がうかがえる大変貴重なものであり、今後の調査研究・展示に活用していきたい。岡本太郎画集関係資料は、平凡社で岡本太郎の画集を担当した編集者が編纂用にまとめた資料群であり、当館収蔵のない写真フィルムなども含んだ貴重な資料となる。寄贈資料については、いずれも今後の整理を経て、活用を進めていきたいと考えている。 購入資料については、岡本太郎がデザインした椅子2種「ひもの椅子」「ゆったり」を購入した。いずれもIDEE（株式会社良品計画）の現行品で、展示室での来館者向け体験できるコーナー等での活用を想定した収集となる。	

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など） [A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]	B
・ 以前より優れた企画展の開催の下地には、綿密で地道な調査研究があったものと感じた。 ・ 収集については、太郎だけではなく一平、かの子関連資料にまで広がり、また関連資料の収集を継続していることで、今後の太郎研究、また同時代の諸文化領域の研究も充実することが期待される。結果として、こうした取り組みが、様々な館事業の糧になると考える。 ・ 限られた予算であっても、継続的に活動し着実に成果を積み重ねている。今後、より積極的に関連作品・資料の収集を図るとともに、調査研究を進展させることができる状況が予算・人員ともに整うことを期待したい。 ・ 岡本一平、かの子を両親とし、自身も幅広いジャンルで活動、多くの人物との交流のあった岡本太郎は時代のキーパーソンとして興味深い存在である。今後、時代とともに個人が所有する関係資料などが散逸してしまう懸念もあることから、太郎を中心にした同時代作家の作品や資料の収集を一層充実され、	

調査研究に供されること、また館内での研究が進むことを期待している。

- ・ より深い岡本太郎研究に資する貴重な資料が多数寄贈されたことが高く評価できる。
- ・ 岡本一平と太郎との書簡の寄贈を受けたことは今後の事業企画に展望をもたらしてくれる点で朗報である。

3 作品の保存・修復、貸出

事業名	作品の保存・修復、貸出
目 標	所蔵作品・資料の状態把握に努め、当館での展示に支障が生じないよう貸出の調整を行う。 作品・資料の保存・管理業務を定期的に行い、適切な処置を施し、館内の良好な環境の維持に努める。
内 容	- 岡本太郎作品を中心に、当館で所蔵する作品・資料の保存及び作品の状態を考慮した作品、資料の貸出を行う。 - 作品調書整備、作品修復業務、燻蒸業務など作品の保存・管理業務を定期的に行い、適切に処置する。 - 環境調査、酸アルカリ調査、温湿度調査、収蔵庫とその周辺の清掃作業など定期的に行い、館内の良好な環境を維持する。

内部評価(自己点検)
[実施状況・成果等]
[作品貸出] - 岡本太郎作品 15 点、岡本太郎撮影写真 5 点、岡本太郎資料 24 点、計 44 点を「戦後デザイン運動の原点 デザインコミッティの人々とその軌跡」展（当館企画展の巡回展。会期:令和 4 年 4 月 9 日～5 月 29 日、会場:香川県立ミュージアム）に貸出。 - 岡本太郎作品 77 点、岡本太郎撮影写真 3 点、計 80 点を「展覧会岡本太郎」（3 会場を巡回。会期・会場:令和 4 年 7 月 23 日～10 月 2 日 大阪中之島美術館、10 月 28 日～12 月 28 日 東京都美術館、令和 5 年 1 月 14 日～3 月 14 日 愛知県美術館）に貸出。 [作品修復] - 岡本太郎の彫刻作品《樹霊Ⅰ》《女》《月の顔》の 3 点の洗浄及び状態調査を行った。屋外作品《母の塔》内部の調査・整備を行った。レリーフ作品《ハンネス・シュナイダー記念碑》《東京オリンピック参加記念メダル》の 2 点について、画面洗浄、欠損部充填、補彩等を行った。
[課題・反省等]
「展覧会岡本太郎」展は、貸出点数が多くかつ主要作品のほとんどが出品されたため、当館の常設展の出品作品に限られ、他館の出品依頼を断るなど、例年以上に調整が難しかった。

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など） [A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]	A
- 購入については、どうしても一定水準の予算が必要になる。 十分な予算がないなかで、創意工夫を重ね、優先順位をつけ、こられの事業が進捗していることを確認できた。 - 基本的な事項を滞りなく確実に慎重に行うことが作品保存・管理の要点であり、目立ちにくい業務ではあるが担当者の高度な知見を必要とする。それを大過なく進めているという点で、職員の知識・経験の深さと高いスキルがあることを示している。 - 美術館では作品の保存と活用という相反するものを両立させねばならず、そのためには常に作品の状態	

を把握しておく必要がある。計画的な展示や利用もさることながら、保存や修復のための予算や安定した保存環境のスペースの確保は今後、一層重要な課題になると思う。

- ・「展覧会岡本太郎展」への大型貸出を含めた他館への貸し出しと常設展との調整をマネジメントできた点が高く評価できる。また彫刻作品の洗浄活動を教育普及プログラムと連動させ、市民と作品をつなぐ一つの機会とした点も評価できる。
- ・東京都美術館で「展覧会岡本太郎展」を見た。作品の貸出に伴う点検・確認の作業は大変と理解した。

4 普及企画

事業名	普及企画
目 標	・学校教育と連携し、学校現場の実情や、要望を踏まえた鑑賞プログラムにより教育普及活動を推進する。 ・近隣の大学、専門学校、幼保・小中高等学校、地域商店街などと連携した事業を行い、地域との交流を深め美術館事業の活性化につなげる。 ・子どもから大人までが幅広く参加でき、美術や岡本太郎芸術に親しめるイベント、ワークショップを開催し、「多くの人に開かれた美術館」というイメージの定着を図るとともに、より地域に根ざした芸術活動の中心的役割をはたす。
内 容	・学校等の団体見学、校外授業のカリキュラムに応じたガイドや鑑賞活動を行う。 ・教育機関で活用する教材の開発や貸出、活用例の紹介、出張授業を行う。 ・教育関係研究会、研修会等における講師の招聘を通じてより多くの教育機関と連携、協働した美術館活動を行う。 ・大学生、高校生をボランティアとして美術館イベントに参加させるとともに、自らが考え、すすんで行動する自主性を重視した活動を行う。 ・幅広い層の来館者に対応した体験型イベントや年齢に応じたワークショップなどを開催し、来館者のニーズに沿っていく。 ・教育普及を目的とした展覧会を開催する。

内部評価(自己点検)

[実施状況・成果等]

《教育プログラム》

団体見学

学校団体や教育機関による鑑賞学習やグループ学習を、対象年齢や学習目的に応じて先生と話し合いながら行うもの。今年度は昨年度同様に、感染症対策を踏まえた鑑賞プログラムを検討し、人数を半数にし、展示室での鑑賞時間を短縮する形で、団体の受入れをしている。休館期間（令和4年9月1日～令和5年1月31日）があったため、学校団体利用も減少した。鑑賞プログラム（こどもの樹コース・森の掟コース）を基本としているが、スタッフによる対話型鑑賞を屋外作品で行い、展示室内ではワークシートを使用するなど、変更して個人鑑賞を行っている。休館期間中は、出張授業に取り組み鑑賞授業を行った。

＜今年度見学団体＞ (R5.2.1 現在)

幼稚園・保育園	4 団体	182 名
特別支援学校	1 団体	21 名
小・中学校	15 団体	1293 名
高校・大学	3 団体	43 名
その他	22 団体	42 名

＜R3 年度＞ (R4.2.1)

幼稚園・保育園	4 団体	230 名
特別支援学校	3 団体	28 名
小・中学校	52 団体	4685 名
高校・大学	12 団体	314 名
その他	21 団体	274 名

職場体験(0校)

中学・高校生に美術館の運営についてその目的や内容を幅広く学んでもらうための活動。学芸員、教育普及、施設管理、監視・受付、ミュージアムショップの仕事等を体験する。また、ワークショップの手伝い等も行う。今年度は休館中に希望する学校がありお断りした。職場体験の代わりに中学校1校の出張講

話（出張授業）を行った。

教材貸出（51 校）

岡本太郎紹介ビデオ・DVD、作品をプリントしたカード（A5、A3）、岡本太郎の「遊ぶ字」をプリントしたカードを貸し出している。下見の際、貸出教材の紹介を必ず行い、それらを活用した事前学習を勧めている。今年度は作品を A5 サイズにプリントしたアートカードの貸し出しが多くみられる。市外や県外からの貸し出し希望も増えている。また、B 倍サイズの大型作品の貸し出しが例年より多く見られた。今年度は、作品をより深く授業で扱ってもらえるように「《太陽の塔》授業セット」「《明日の神話》授業セット」を作成。作品画像だけではなく、岡本太郎が作品制作をしている様子のわかる写真や関連作品などを A3 サイズにプリントしパウチ加工した 20 画像のセットとなっている。

オンライン教材 どこでも TARO アトリエ

「どこでも TARO アトリエ」は、令和 2 年 4 月に出された緊急事態宣言下で、多くの方が自宅で過ごされている時期に、美術館へ行けなくても、自宅で岡本太郎の作品を楽しんでもらえるように始めたコンテンツである。これまで好評だったワークショップなどから、大人でも子どもでも、気軽に楽しめるアイデアを紹介した。市内市外を問わず、団体見学前後での学校現場での利用等も定着してきており、更新頻度は減らしながら、恒常的なアウトリーチコンテンツとして今後も公開・更新を続ける予定である。

配信開始：令和 2 年 4 月 19 日（日）～

<第 24 弾 どこでも TARO トランプ>

1977 年、岡本太郎はトランプをデザインし発表している。今回は太郎さんがデザインした絵札を公開した。マグネットシートやのり付きパネル、紙袋にトランプの絵を描き作成したものを紹介した。

出張授業（6 校・1 園）

図工・美術科における鑑賞活動として、また異学年交流によるイベント、ワークショップとして、学校と美術館と一緒に鑑賞プログラムをつくり、実施する。学校行事や授業公開において活用する学校もある。休館期間中に、6 校の出張授業を行った。大型作品やアートカードを活用し、鑑賞授業を行った。実際に美術館で本物の作品を見たいという声が多く聞かれた。

教員向け出張授業（1 件）

岡本太郎や作品、貸出教材を利用した授業のレクチャーを、小学校・中学校の先生方に行い、岡本太郎の啓蒙と、美術館の教材を使用したアート活動を周知した。

川崎市小学校図画工作科研究会夏季実技研修に赴き、どこでも TARO アトリエからの実践や、カードゲームなどを行い、先生方とともに行える鑑賞教育について学ぶ場を持った。

《普及イベント》

<TARO 鯉に挑む！ in ラゾーナ川崎プラザ>

ワークショップ 日程 令和 4 年 3 月 26 日（土）①10:00～11:30 ②12:30～14:00 ③15:00～16:30

作品展示日程 令和 4 月 23 日（土）～5 月 5 日（木祝）

内 容	恒例となった出張ワークショップ「TARO 鯉に挑む！」を川崎駅に隣接しているラゾーナ川崎プラザ 5 階の野外スペースで行った。太郎鯉や子ども達のつくったカラフルな鯉のぼりに誘われて、親子で楽しく制作する様子が見受けられた。普段、美術館に行く機会が少ない方達にも、岡本太郎美術館に興味をもつきっかけになっていた。
場 所	ラゾーナ川崎プラザ 5F 中央通路
料 金	無料
参加人数	①18 名 ②18 名 ③18 名（当日申込）

<TARO 鯉に挑む！2022>

ワークショップ 日程	令和 4 年 4 月 23 日（土）、24 日（日） 各日①10:00～12:00 ②13:30～15:30
作品展示日程	令和 4 年 5 月 1 日（日）～5 月 5 日（木祝）
内 容	今年で 11 回目になる恒例イベント。常設展の作品をはじめ、屋外に展示している《TARO 鯉》を鑑賞し、アトリエでオリジナルの鯉のぼりを制作し、母の塔広場に展示。昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として各回の定員を 10 組として行った。ただ、今年は午前・午後の各 2 回開催とし、昨年度より 2 倍多い参加者に制作してもらうことができた。人との距離も十分にとれ、参加者は安心した様子だった。GW 期間中の広場での展示は、これまでの鯉のぼりを含め、100 尾が泳ぎ、生田緑地を訪れる人を楽しませた。
場 所	創作アトリエ、常設展示室、ギャラリースペース、母の塔前広場
料 金	無料（要観覧料）
参加人数	23 日：①10 組（子ども 9 名、大人 8 名） ②10 組（子ども 8 名、大人 11 名） 24 日：①10 組（子ども 8 名、大人 8 名） ②10 組（子ども 12 名、大人 10 名） (電話申込)

<描いて送ろう！こどもの樹>

応募期間	令和 4 年 5 月 20 日（水）～4 月 30 日（土）
内 容	こどもの日関連イベント“みんなでつくろう！こどもの樹”で制作する《こどもの樹》の塗り絵を、オンラインで公開し、自宅で塗り絵をして美術館に郵送で送っていただき、みんなでつくる“こどもの樹”に参加していただいた。初めての試みとなったが、遠方からのものもあり、美術館に来館できなくても、作品を身近に感じる機会を提供できた。
参加人数	13 通 19 名

<みんなでつくろう！こどもの樹>

日 時	令和 4 年 5 月 3 日（土）～5 日（木） ①10:30～11:30②13:00～16:00
展示期間	令和 4 年 5 月 1 日（土）～5 月 15 日（日）
内 容	今年で 3 回目となる、《こどもの樹》の顔で作った塗り絵と自由に描けるイベント。用意した丸い紙に自由に顔を描いて『こどもの樹』を作りました。ゴールデンウィーク中の小さい子ども連れのご家族や大人の方にも楽しんでいただいた。多くの方にご参加い

場 所	ただき、賑やかなイベントとなった。
料 金	ギャラリースペース
参加人数	1 日目：大人 77 名 子ども 75 名 2 日目：大人 90 名 子ども 71 名 3 日目：大人 68 名 子ども 53 名 合計：437 名（当日申込）
＜中学生「夏休みの宿題手伝います」ツアー＞	
日 時	令和 4 年①7 月 27 日(水) ②8 月 10 日(水)③8 月 18 日(木) 10:00～11:00
内 容	今年で 5 年目となる中学生向けの美術館見学ツアーを行った。中学校では夏休みの課題として美術館に行き感想を書いたり、新聞を作ったりする学校が多く美術館スタッフによるツアーを行っている。今年度は、美術館の役割にも触れ、作品だけでなく美術館自体にも興味・関心を向けることができるようなワークシートを作成。友達や家族と一緒に参加し、作品の話しをしながら鑑賞したり、一人で真剣に作品を鑑賞する様子が見られた。
場 所	常設展示室、企画展示室
対 象	小学生以上
料 金	無料
参加人数	①19 名（中学生 9 名、付添 10 名）②22 名（中学生 10 名、付添 12 名） ③4 名（中学生 2 名、付添 2 名）（先着順/電話受付）
＜“太郎ブラック”を知ろう作ろう！＞	
日 時	令和 4 年 8 月 7 日（日）13:30～15:30
内 容	岡本太郎の作品や制作に深く迫るため、平面作品で多く使用した素材の油絵具に焦点をあてたワークショップを行った。作品を鑑賞し、絵具製造メーカーの株式会社クサカベの方を講師に迎え、太郎さんが使っていた黒色の油絵具（アイボリーブラック）を実際に作った。
場 所	常設展示室、創作アトリエ
講 師	岩崎友敬（株式会社クサカベ 技術開発部）
料 金	1200 円＋観覧料
対 象	小学 4 年生以上～大人
参加人数	10 名（子ども 1 名、大人 9 名）（先着順/電話受付）
＜油絵具でドローイングを描こう！＞	
日 時	令和 4 年 8 月 7 日（日）13:30～15:30
内 容	岡本太郎の絵画作品の多くは、油絵具を使用している。あまり馴染みのない油絵具を使って描くことで、岡本太郎の制作への理解につなげることを目的とし、「岡本太郎の調色台スケッチ」を参考にし、岡本太郎が使用していた絵具の色を選び、思い思いにドローイングを行った。参加者は、油絵具の匂いや質感に驚きながらも、深い色合いを楽しんでいた。

場 所	常設展示室、創作アトリエ
料 金	1200 円＋観覧料
対 象	小学生以上～大人
参加人数	21 名（子ども 11 名、大人 10 名）（先着順/電話受付）

<美術館裏探検>

日 時	令和 4 年 8 月 11 日（木祝） ①11:00～11:40 ②13:30～14:10
内 容	普段見ることの出来ないバックヤードの一部を公開する子ども限定のイベントを行った。第一収蔵庫、第二収蔵庫、大型エレベーター、搬入口、キャットウォークなどを探検しながら、美術館がどのように作品を保管し展示しているのかについて説明した。普段は入れない場所にキョロキョロ、ワクワクしている子ども達の様子がうかがえた。
場 所	展示室、バックヤード
対 象	小・中学生
料 金	無料
参加人数	①10 名 ②9 名 （先着順/電話受付）

<TARO Birthday Concert>

日 時	令和 5 年 2 月 26 日（日） 14:00～14:45
内 容	岡本太郎は明治 44 年（1911）年 2 月 26 日生まれ。112 歳のバースデーを祝って、コンサートを開催。今年は、打楽器奏者の上原なな江氏によるプログラムとなった。
場 所	ギャラリースペース
出 演	上原なな江（打楽器奏者）
共 演	田中拓也（サクソフォン）、石原可奈子（ピアノ）
対 象	どなたでも （事前予約制・電話受付・先着順）
料 金	無料（椅子席 40 席は要観覧券）
参加人数	椅子席 名 立ち見 名

<はいはい&よちよち美術館ツアー>

日 時	令和 4 年 ①4 月 13 日（水）②5 月 18 日（水）③6 月 8 日（水） 令和 5 年 ④2 月 8 日（水）⑤3 月 8 日（水）各日 10 :30～11 :30
内 容	親子で一緒に鑑賞を楽しむことで、コミュニケーションを図りながら、小さな子ども無理なく美術館の雰囲気味わってもらえることができる鑑賞会。
場 所	ガイダンスホール～常設展示室
対 象	3 か月～3 才の幼児とご家族 先着 5 組
料 金	要観覧料
参加人数	①2 組（子ども 2 名、大人 4 名）②5 組（子ども 7 名、大人 7 名） ③5 組（子ども 5 名、大人 6 名）④5 組（子ども 5 名、大人 6 名） ⑤今後開催の予定 （事前電話申込）

《休館中イベント》

<十五夜フェスタ・“マスカレード風” 太陽の塔の仮面をつくろう>

日 時	令和 4 年 9 月 10 日 (土) 11:00～16:00
内 容	生田緑地内イベント「十五夜フェスタ」に合わせて野外ワークショップを開催した。紙皿を使って、“太陽の塔”の3つの顔（黄金の顔、太陽の顔、黒い太陽）のどれか一つを制作した。未就学児を連れた家族連れが多く、親子で協力して穴をあけたり、紙を切ったり、楽しんで制作する様子が見られた。
場 所	生田緑地中央広場客車前
対 象	どなたでも
料 金	200 円
参加人数	88 名（子ども 85 名、大人 3 名）（当日申込）

<音あそび♪かわさきジャズ@岡本太郎美術館>

日 時	令和 4 年 10 月 15 日 (土) 第 1 部 ①10:00～10:30 ②10:30～11:00 第 2 部 13:00～14:00 第 3 部 14:00～15:00
内 容	「かわさきジャズ 2022」とのコラボレーション企画として休館中の企画展示室を利用しワークショップ・ジャズライブを開催した。
出 演	第 1 部 MKG Band 第 2 部 川崎ドラム教習所
場 所	企画展示室
対 象	第 1 部 中学生以下 第 2 部 中学生以下 第 3 部 小学生・中学生
料 金	無料
参加人数	第 1 部 55 名（先着順/電話受付） 第 2 部 23 名（他 観覧者 40 名） 第 3 部 20 名（他 観覧者 28 名） （先着順/電話受付/ ただし、観覧については当日受付）

<KITEN in TARO museum WS>

日 時	①令和 4 年 10 月 22 日 (土) 10:00～12:30 ②令和 4 年 10 月 23 日 (日) 13:00～15:30
内 容	休館中の企画展示室で、舞踏家・加藤みや子氏と、加藤氏率いるダンサーたちの指導のもと、TARO 賞入賞経験のある美術家・金沢健一氏の音の出る作品に触れながら、身体を動かすワークショップを行った。「ダンス」「美術」「音」を体感できる横断的なプロジェクト。
場 所	企画展示室
講 師	加藤みや子（舞踏家）、加藤みやこダンススペースダンサー、金沢健一（美術家）
対 象	①小学校 6 年生まで（未就学児は親子で参加） ②中学生以上
料 金	①【未就学児・保護者】または【小学生・保護者】での参加は 1 組につき 1,000 円 【参加者が小学生のみ】または【参加者が小学生以上で保護者が付き添いのみ】の場合は無料

参加人数 ②一般 1,000 円、中・高・大学生 500 円、付き添いの方は無料
①15 名 ②8 名（先着順/電話受付）

<KITEN in TARO museum>

日 時 令和 4 年 11 月 3 日（木・祝）①11:00～12:30 ②14:30～16:00
内 容 美術家・金沢健一氏の「音」の出る作品が配置された展示空間で、舞踊家・加藤みや子氏率いる「加藤みや子ダンススペース」がダンス公演を行った。観覧者は、金沢作品の奏でる音を活かしたダンスパフォーマンスを楽しんだ。「KITEN」とは「帰点」を意味し、過去にも金沢氏と加藤氏は「KITEN」としての共演経験をもつ。
場 所 企画展示室
出 演 加藤みや子（舞踏家）、加藤みやこダンススペースダンサー、金沢健一（美術家）
対 象 どなたでも
料 金 一般 1,000 円、中・高・大学生 500 円、小学生以下無料
参加人数 ①100 名 ②57 名（先着順/オンライン受付）

<TARO 作品にふれて・洗って・楽しもう>

日 時 令和 4 年 11 月 5 日（土） 13:00～16:00
内 容 屋外に設置されている彫刻《樹霊Ⅰ》、《女》の洗浄をすることで、通常は触ることのできない作品に触れるとともに、美術館の仕事を体験するプログラム。触りながら作品を鑑賞し、洗浄することで、視覚のみの鑑賞とは一味違った鑑賞を楽しんだ。
場 所 ガイダンスホール、美術館屋外
講 師 黒川弘毅（武蔵野美術大学/有限会社ブロンズスタジオ）
対 象 どなたでも ＊小学 3 年生以下は要保護者同伴
料 金 無料
参加人数 12 名（先着順/電話受付）

<ミニチュア・坐ることを拒否する椅子>

日 時 令和 4 年 11 月 13 日（日） 10:00～11:30
内 容 どこでも TARO アトリエ第 5 弾に掲載されている「ミニチュア坐ることを拒否する椅子」のワークショップを広い企画展示室で行った。紙粘土をこね、思い思いの作品作りを楽しんだ。
場 所 企画展示室
対 象 どなたでも ＊小学 3 年生以下は要保護者同伴
料 金 500 円
参加人数 38 名（子ども 19 名、大人 19 名）（先着順/電話受付）

<青空 TARO アトリエ 描こう！“太陽・風・植物・動物”>

日 時 令和 4 年 11 月 13 日（日） 13:30～15:30
内 容 美術館を飛び出し、自然豊かな生田緑地を散策しながら描くイベント。太郎さんの作品

	をパネルで紹介しながら、作品テーマの“太陽”“風”や、館外に設置されている《樹霊Ⅰ》《母の塔》などを描いた。
場 所	創作アトリエ、美術館周辺
対 象	どなたでも ＊小学3年生以下は要保護者同伴
料 金	300 円
参加人数	22 名（子ども 10 名、大人 12 名）（先着順/電話受付）
＜専修大学インターン生によるイベント あつめよう自然 つくろう太郎 〜げい樹つは ばく葉っだ！〜＞	
日 時	令和4年11月20日（日）①10:30～12:00 ②13:30～15:00
内 容	子ども達に岡本太郎を知ってもらうこと、野外に出て自然と触れ合ってもらうことを目的として、集めた葉や枝を使って、太郎さんの《マスク》などの顔や、《太陽の塔》を制作するイベントを専修大学のインターンシップ生が企画し行った。自然の形や色を楽しみながら素材を試行錯誤して、独自の表現を楽しむイベントとなった。
場 所	創作アトリエ、美術館周辺
料 金	無料
対 象	小学生以上 ＊未就学児は要保護者同伴
参加人数	①18 名（子ども 10 名、大人 8 名）②23 名（子ども 13 名、大人 10 名） （先着順/フォーム申込）
＜美術館で描こう！＞	
日 時	令和4年11月27日（日） ①10:30～12:00 ②14:00～15:30
内 容	第24回 TARO 賞に入選された園部恵永子氏を講師に迎え、描きたいままに描けない筆・グングニルを使って、岡本太郎の有名な作品をもとに絵を描くワークショップを行った。家族で協力してグングニルの“思い通りに描けないように負荷がかかる仕掛け”を作り、動く紙に絵を描いた後、企画展示室に展示し鑑賞会を行った。
場 所	企画展示室
講 師	園部恵永子（作家）
対 象	3歳から小学生までの子どもとその保護者
料 金	500 円
参加人数	①22 名（子ども 9 名、大人 11 名） ②26 名（子ども 11 名、大人 15 名） （先着順/電話受付）
＜じゅえき太郎さんとオリジナル昆虫を描こう！＞	
日 時	令和4年12月4日（日）①10:30～12:00 ②14:00～15:30
内 容	第16回 TARO 賞に入選され、イラストレーターとしても活躍されているじゅえき太郎氏を講師に迎え、オリジナルの昆虫を描くワークショップを行った。参加者は、じゅえき太郎氏の幼少期やイラストレーターの仕事のお話など興味深そうに聞き、オリジナル昆虫のプロフィールを考え、自由な虫を想像し描いた。最後には、プロジェクターで投影したじゅえき太郎氏の画像に、参加者のオリジナル昆虫を展示しコラボレーションし

場 所	企画展示室
講 師	じゅえき太郎（作家）
対 象	小学校3年生～大人
料 金	500 円
参加人数	①35 名（子ども 20 名、大人 15 名）②42 名（子ども 17 名、大人 25 名） (先着順/電話受付)
[課題・反省等]	
《教育プログラム》 ・学校団体の受入れ人数に関しては、学校側はほぼ通常活動になっているため、感染状況に応じて段階的に緩和している。今後については、一般来館者との兼ね合いと適切な鑑賞環境等を検討しながら進める必要があると考えている。 ・出張授業「職場講話」や「どこでも TARO アトリエ」などは、コロナ禍で来館できない時期に実施した事業だが、誰もが文化・芸術活動に触れる機会として活用していく必要があると考える。また、「どこでも TARO アトリエ」は学校教育現場でも利用が広がっているが、公開中のコンテンツを来館につなげるような仕組みを試み、オンラインと来館を結びつける企画を考えていきたい。 《普及イベント》 ・今年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ワークショップ等の定員は従来の半数としたが、午前午後と実施回数を増やすなど、定員を増やす工夫も行い、時々の展示内容に即した主旨のワークショップ等を企画し、外部講師によって参加者の関心を掘り下げるような意欲的な企画も実施できた。 ・今後は新型コロナウイルス感染症に関する国や市の動向等を注視しながら、適切な形でワークショップ等を実施していく必要がある。 《休館中イベント》 ・休館中は、学芸と普及の両系のスタッフで協力し作品のない企画展示室で、ジャズのコンサートやモダンダンス公演、空間を広く使った規模でのワークショップを開催し、好評を得た。今回の取組を今後の展示室の活用や美術館活動に活かしていく必要があると考えている。	

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など） [A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]	A
・幼児から成年者までを視野に入れた事業展開に、つよい関心を得た。駅からの利便性も高くないことから、事業への参加者を得ることもなかなか難しいのではないかという危惧をもっていたが、継続性のある取り組みによって、普及事業は館にとってかけがえのないものであることを感じた。岡本太郎を軸としつつも、より幅広い普及事業展開が期待できる。 ・コロナ禍にあっても様々な工夫を重ね、誰でも興味を持ちやすいプログラムを継続的に実施したことは特筆に値する。また、展覧会でのリアルな体験とともに、「どこでも TARO アトリエ」などオンラインコンテンツも立ち上げ、外出を控えるという選択の中でも美術を楽しむ環境を提供した努力は高く評価できる。 ・コロナ禍において、普及活動は制限を受けやすく、苦勞されたことも多かったと思われるが、数多くの	

イベントなどを企画実施されている。出張授業は美術館が外に出ていくという一方向ではなく、授業を受けた人が美術に興味を持ち、美術館に足を運ぶという循環を作ることが大事であり、美術館で本物の作品を見たいという声が多く聞かれたという点は評価できる。

- ・コロナ禍や休館期間があった中でも、できる限りの団体受け入れや、自由参加できるプログラムを企画実施している点が高く評価できる。また、教材貸し出しやオンライン教材など、美術館を訪れることが難しい対象者に寄り添ったプログラムの開発も評価できる。また、「太郎の創造展」といった、コレクションを教育普及の視点から再解釈した展示が開催できたことも良かった。
- ・美術館の「教育プログラム」は幼児から大学生まで実にきめ細かく整っており、幼児からアートの環境に親しむ方針は、太郎の作品だから有効なのだと思う。戦前の郷里の偉人としてではなく、数あるキャラクターの一つとして親しむことができるだろう。休館中も色々な事業を実施しているのも、市民目線に沿っている。

5 広報活動

事業名	広報活動
目 標	・新型コロナウイルスの感染状況により変動する情勢に対応し、他館の情報収集も行いながら展覧会・開館情報を適切に発信する。 ・SNS、ホームページ等 WEB 媒体の活用を深耕し発信力を高める。 ・休館期間中および美術館再開に向けて、市の方針と情報を共有しながら、記者・メディアに向けて情報を適切な表現で発信を行う。 ・休館期間中の広報誌「TARO ニュース」の紙面の工夫や、SNS (Twitter) の発信をこまめに行うことによって、休館の情報と当館にアクセスしてくれる方とのコミュニケーションを絶やさないよう情報発信を行う。
内 容	【開館中の広報活動】 ・広報誌「TARO ニュース」刊行 無料広報活動 ・小田急線沿線 3 駅(下北沢駅・成城学園前駅・新百合ヶ丘駅)相互利用促進のためチラシ配架設置 ※2023 年 1 月より町田駅追加設置 ・川崎駅東口広告塔デジタルサイネージ掲出 ・小田急・JR・商店街へのポスター配布 ・東急電鉄川崎市内駅構内へのポスター掲示を継続実施 ・武蔵小杉エリアマネージメント デジタルサイネージへのポスター掲出 ・プレスリリースによる新聞・雑誌・WEB への告知（郵送・メール） ・会期中主要マスコミへの掲載依頼、取材受付・対応 ・展覧会ちらし・ポスターを他美術館等へ配布・掲示 ・プレス内覧会の実施 ・インターネット活用による広報（美術館 HP、SNS (Twitter)、外部ページへの登録・配信） ※在宅コンテンツ（どこでも TARO アトリエ）継続発信（公式 HP） ※第 26 回 岡本太郎現代芸術賞 作品募集要項・申込受付等、作成・掲出（公式 HP） 有料広報活動 ・ターゲティング配信広告（2023 年 2 月 18 日～4 月 16 日） ・東京新聞広告（複数回） 【休館期間中の広報活動】 ・休館中プレスリリース、HP 表示内容変更、広報誌制作・配布、イベント告知、Twitter 等

内部評価(自己点検)
[実施状況・成果等]
・前年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大状況に対応しながら、イベントの開催・来館者への呼びかけ・開館・休館情報をこまめに適切な表現で発信し、更に小松美羽展の日時時間指定予約の案内、緑地の他施設と対応情報や発信手法を共有・整理し、わかりやすく発信した。 ・小松美羽展会期中、小松美羽氏本人によるテレビ・ラジオ出演露出や、著名人による来館、ツイッターによる来館後日レポート発信後のユーザーの反応の他、巡回展「展覧会 岡本太郎」関連のNHK テレビ・ラジオ番組（TAROMAN など）の放送により、岡本太郎をリスペクトする著名人が発信することで、20代～30代などのファンや若い世代の来館者がさらに増えた。 ・Twitterの投稿は、休館期間中から再開まで、週末開催するイベント情報やカフェ・ショップの営業・西ロキッチンカー出店情報や美術館周辺の季節情報を織り交ぜながら、再開直前までこまめに行った。 ・休館中の工事内容及び、美術館再開に向けて、市の方針と情報を共有しながら、記者・メディアに向けて情報を適切に発信した。
[課題・反省等]
・社会情勢を考慮しながら、展覧会情報と生田緑地の四季折々の情報とカフェメニューやショップ情報、クイズや親しみやすい情報を織り交ぜて、引き続き若い世代を中心に発信力のあるTwitter発信を強化する。 ・休館中に発行した「TARO ニュース 80号」は従来のスタイルを変更し、新たな紙面づくりを市と連携しながら取り組み、より効果的な情報発信につながったことから、今後の広報誌制作にも活かしていきたいと考えている。 ・来館者アンケートや、SNS全体の反応を分析し、次年度に向けてより効果的な発信に努める。

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など） [A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]	B
・SNSの普及によって、即時性のある情報提供が求められる今日、美術館の広報活動は難しい部分が多くある。実際の観覧、あるいは普及事業に参加する動機付けをもたらすための工夫は、今後も継続していくべき課題である。 ・バランスよく広報が実施されてきており、順当な集客と美術館のイメージ向上を実現している。SNSのフォロワー数やYouTubeの視聴回数なども決して低い数字ではない。ただ、コロナ禍が落ち着きを見せてきた昨今、人々の余暇の選択肢の多様化が想定され、美術館の魅力をより印象的に発信する工夫が望まれる。 ・常設展に比べて企画展での広報の対応件数に対する掲載件数がやや少ないのが気になる。せっかくの企画展であるので、早めの告知や広報活動を展開し、評価、集客につながるとよい。 ・様々なメディア、機会を捉え、多様なコミュニケーションを取ってきたことを評価した。また、目標を設定してその達成度を評価する形が取れるとより良いと感じた。 ・小松美羽展で展開された広報活動の波及効果は相当広範囲に及んだと考える。	

6 施設・設備の整備

(1) 施設・設備の整備

事業名	施設・設備の整備
目 標	開館から 23 年を経過し、建物・設備が老朽化しており、施設の長寿命化及び作品の保全、市民の施設利用の利便性の向上、安全・安心の確保を図るため施設の計画的な更新・補修を行う。
内 容	・母の塔前広場等防水設備長寿命化整備工事 ・空気熱源ヒートポンプ設備整備 ・空調自動制御装置整備 ・電極式蒸気加湿器長寿命化整備 ・券売機更新工事 ・LED化工事 ・バリアフリー対応工事

内部評価(自己点検)	
[実施状況・成果等]	
今年度は長年の懸案事項であった母の塔前広場の防水工事について、工事音の館内への影響を考慮し 9 月から 1 月まで休館したうえで実施し、館内への漏水及び気温の影響により各所で発生していた路面の盛り上がりやタイル欠損などを解消することで、館内外の環境の改善に繋がった。併せて、空調自動制御装置、空気熱源ヒートポンプ、券売機などの機器について、計画に基づき順次整備、更新を行った。 また、館内の加湿調整の基幹となる電極式蒸気加湿器の更新工事、収蔵庫等電気設備のLED化、屋外スロープ手摺設置などバリアフリー工事を実施した。	
[課題・反省等]	
計画修繕とは別に、経年劣化等が原因と想定される突発的な機器の故障による大型緊急工事が増加しており、早期の修繕箇所の発見・対応が必要となっている。	

[外部評価] 意見(評価できる点や課題など)[A:十分に達成 B:概ね達成 C:達成に至らず]	B
・生田緑地という環境のなかでの施設維持事業は、特殊な条件下で行われていると考えるが、計画的な整備計画のもと、来館者の安全、また美術館としての機能維持を念頭に、当事業が実施されていることが確認できた。 ・周囲の自然の豊かさが美術館のイメージ向上につながっているとはいうものの、施設・設備の維持・整備には大きな労力が必要になるのではと推察される。加えて、エネルギー費用の高騰などがあるものの、外構部も含めて高い水準で施設の維持がなされている。 ・長年の懸案であった各種工事を実施され、設備、バリアフリーなど来館者への対応も行われたことは評価できる。建物の経年劣化は避けられず、今回、修繕や更新を行った箇所もいずれは不具合が生じる。そうしたことへの対応として、定期点検の頻度をあげる、あるいは日常のモニタリングの実施が重要になると思う。	

(2) 休館中の館内整備・補修

事業名	休館中の館内整備・補修
目 標	休館期間（令和4年9月～令和5年1月）を利用して、老朽化した館内各所の補修、整備を行う。開館中はできない展示室等のメンテナンス作業を中心に修繕・整備を行うとともに、館内外の案内サインについてもリニューアルし、視認性の高いものに更新する。
内 容	・常設展示室等壁面整備業務委託 ・館内サイン等製作業務委託 ・館内メンテナンス業務委託 ・企画展示室ライティングレール点検・増設 ・常設展示室 映像演出システム修繕

内部評価(自己点検)	
[実施状況・成果等]	
今年度は、母の塔前広場の防水工事に伴う5カ月間の工事休館の期間にあわせて、主に常設展示室やエントランスホールを中心に館内各所の補修および塗装等のメンテナンスを行った。 経年で色が劣化し、欠損や傷みが激しかった常設展示室の壁面の補修・塗装を中心に、新型コロナウイルス感染症対策として貼った床面のシールやテープの除去、ひび割れの補修等を行い、限られた予算の範囲で工夫をしながら整備を行った。あわせて、企画展示室のライティングレールの点検及び破損個所の増設、常設展示室の映像演出システムの修繕なども行った。 館内外サインの更新にあたっては、前年度にサイン計画の策定を委託したフジワラテッペイアーキテクツラボ及び色部デザイン研究所の協力により、岡本太郎の個人美術館にふさわしい新しいデザインを検討し、空間に合ったサイン計画で更新することができた。	
[課題・反省等]	
休館中の作業として、当初予定した箇所については概ねメンテナンスを行うことができたが、開館から20年以上が経過していることから、引き続きメンテナンスを行いながら適切な維持管理を行っていく必要がある。	

[外部評価] 意見（評価できる点や課題など） [A：十分に達成 B：概ね達成 C：達成に至らず]	B
・経年劣化、また思わぬ支障が出てくる時期を迎えると思うが、日常的な保守点検を重ねることによって、支障を未然に抑制されていくことを期待する。 ・視覚障害者のための音声案内など、当事者とともにデザインする（インクルーシブ）ような施設整備を進めてもらえたらと思う。 ・来館者が真っ先に気がつくのはトイレや展示室のサイン工事である。	